

中学生の家庭の目標構造が友人関係、学習方略そして学習コンピテンスに及ぼす影響

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾形, 和男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7768

【論文】

中学生の家庭の目標構造が友人関係、学習方略そして 学習コンピテンスに及ぼす影響

尾形和男

愛知教育大学教育学部

要約

本研究は中学生の家庭の目標構造が、生徒の友人関係、学習方略、学習コンピテンスに及ぼす影響について検討することである。206名の大学生に中学生時代の自己の状況について上記の各状況を調べる質問紙に回想法により回答してもらった。

クラスタ分析の結果、家庭の目標構造が生徒の学習の仕方に導く一方で良好な友人関係が形成されている場合には生徒は深い学習方略を取ることが示された。しかし、家庭の目標構造が生徒の成績に直接結びつく場合には好ましくない学習方略が形成される傾向があった。次にパス解析を行ったところ、両親が子どもの学習の仕方に関心を持つ場合には、子どもの効果的な深い学習方略と積極的な学習方略を増加させることが示された。両親が子どもの学習の方法について関心を持つような関わり方は友人を増加させ、積極的な学習コンピテンスを増加させた。そして、両親と先生のコミュニケーションは子どもの積極的な深い学習方略と学習コンピテンスを形成することが示された。その一方で、両親が子どもの成績を過度に強調する場合には子どもの深い学習方略と積極的な学習コンピテンスは減少し、セルフハンディキャップによる学習方略が増加することが示された。

キーワード

家庭の目標構造、友人関係、学習方略、学習コンピテンス、中学生

問題と目的

中学校は、各教科の専門的内容が導入され、その一方で進学を中心として将来について幅広く考えていくことが求められる時期でもある。それと同時に、学習はより専門的になり学習内容が深くなる半面難しくなり、生徒によっては教科により興味を深めると同時に不得意科目として意識するなどのことも生じてくると考えられる。

学業成績は中学生にとって重要な領域である(Wigfield, Eccles, Yoon, Harold, Arbretton, Freedman, Doan, & Blumenfeld, 1997)との指摘にもあるように、生徒の専門性を高め、将来の自己の進路を決定し、また成績によっては学校への適応問題として発展してしまう可能性があると考えられる。このような背景の中、中学生の学習に関して、従来動機づけ、達成目標、学習方略など生徒の学習行動を左右する要因として考えられる効率的な学習効果について検討が行われてきている。

動機づけ、達成目標、学習方略の相互の関連性については因果関係を主として研究がおこなわれており(e.g., Ames, 1992; Ames & Archer, 1988; Dweck & Leggett, 1988; Maehr & Midgley, 1991)、3要素間に関連性が確認されるなどの成果が報告されている。

これらの研究に関連して、達成目標については2つの方向が指摘されている。一つはマスタリー目標(mastery goal)であり、取り組む姿勢や努力する姿勢を評価するものである。もう一つはパフォーマンス目標(performance goal)であり、これは能力や結果を重視する立場である。一般的にマスタリー目標は望ましい動機づけや認知の過程に関連し、パフォーマンス目標はネガティブな遂行結果を招く不適切な動機づけや認知の過程に関連することが指摘されている(Wolters, Yu, & Pintrich, 1996)。

また、達成目標志向のあり方は、生徒個々の学習への取り組み方である学習方略(learning strategy)に影響をもたらすと考えられ、2つの方向から論じられている。それは、深い処理と浅い処理の2つの処理過程との対比であり(Zimmerman & MartinezPons, 1990)、前者は意味を深く考えながら内容を理解し知識の増加を図る処理形式であるのに対して、後者は暗記やリハーサルによる対処法を指している。しかし、学習者の行動はそれだけではなくかなり複雑である。現実には自分の取り組むことがうまくいくかどうか明確に捉えられない場合も多くあり、このような時自己の行なった行動の結果について

の見通しが持てないなどの状況が生じると考えられる。伊藤 (1995) はこれに関してはセルフ・ハンディキャッピング (課題回避目標志向行動) として説明している。つまり、子どもが失敗を恐れる場合に自尊心を守る行動に移行し、失敗の理由をそのせいにするように、わざと前もって自分に不利益になるような行動を示す場合である。中学生の達成目標志向と学習方略の関連性については、マスタリー目標志向は深い処理の方略を、パフォーマンス目標志向は浅い処理の方略を、課題回避目標志向の強い場合にはセルフ・ハンディキャッピングによる方略を取ることが報告されている (Nolen, 1988; Yamauchi & Miki, 2003)。

上記の学習方略に関する行動の形成要因については、従来は多くが学校あるいは学級という環境の中で、教師、教室の中で行われる学習目標、学級風土との関連で論じられることが多かった。しかし、現実的な視点として学校という環境は、教師と生徒から構成されており、生徒と教師、生徒と生徒の関係が基本にある。しかも、生徒との関係も個人的な友人としての関係をはじめとして、集団との関係を含め多岐にわたる。換言すれば学校の生活は生徒と生徒、生徒と先生のかかわりの連続である。その関係の中には、友達としての遊びや喧嘩、行事での競争、協力や勉強などの種々のことが含まれており、人間関係の相互作用の中でお互いに多大な影響をもたらしていることになる。学習に関しては、とりわけ生徒一人の問題としてよりも、友人関係との中で論じられるのが自然と考えられる。

上記の視点に基づき、児童・生徒の友人関係と学業成績、学習コンピテンス、学業適応、学校適応との関連性に関する研究が報告されている (e.g., 外山, 2005; 石, 2006, 2005, 2003; Ryan, 2001; Marsh, Kong, & Hau, 2000; Tesser, 1988)。これら一連の研究は、学習コンピテンス、学業適応、学校適応の在り方は基本的に学校や学級での友人関係が影響するとする考え方と、学業適応が友人関係の在り方を左右するとする考え方が指摘されているが、両方の考え方そのものは友人関係と学業適応は密接な関係を持つことを示すものであり、学校や学級での友人関係の重要性が通底に存在している。

友人関係を基本にした場合、友人関係の良し悪しに関しては友人から受容されているかどうかということが重要要因の一つとして指摘されている。具体的には、人気が高く級友から受容されている児童・生徒はそうでない場合に比較して学習意欲や学業成績が高く (e.g., Wentzel, Barry, & Caldwell, 2004; 中谷, 2002)、級友からの受容が生徒の安心感を高め、そのことが学業に対する意欲や関心を高め次の行動を促進すると考えられている。同様に、Altermatt & Pomerantz (2003) は小学校の中学年から高学年の生徒について、友達の結びつきの強さとし

て、学業に関連した信念、態度と学業成績の類似度について検討したが、すべて相互の領域について有意な関連が示されている。つまり、友達として類似した意識や価値観を持っている場合に学業成績が良いことが示されている。この場合、友人の友好性として相互選択を基本として扱っている。

また、親の子どもに対する学習への関与について、親子関係を基本として存在する家庭の目標構造の視点から幾つかのことが報告されている。小学校5年生、中学校2年生、高校2年生の各集団の家庭環境と理科の成績との関連性を検討し、小学校5年生では家庭にある蔵書数、家人の勉強への助け、校外学習時間が、中学校2年生では家庭蔵書数、高校2年生では家庭蔵書数が主に影響しているとした報告 (清水, 2007)、小学校生徒の学業達成動機と家庭環境の関連性について、父親の職業、母親の職業、父親の教育、母親の教育、家族の大きさ、家庭での学習促進要因の6要因が影響しているとした指摘 (Muola, 2010) がある。また、Bansal, Thind, & Jaswal (2006) も類似した結果を報告している。さらに、Epstein (1989) は子どもの学業達成の促進との関連性から、1 課題の構造と活動の多様性、2 権威的構造、3 報酬の構造、4 集団化の構造、5 評価の構造、6 時間の構造化、の6要素を指摘している。6は学校と親との融合に基づく環境形成は子どもの学業達成行動に効果的な影響をもたらすということを示したものである。一方、尾形 (2013) は中学生の家庭の調査に基づいて、夫婦関係の良好な家庭は、家庭の学習についての目標構造形成にも影響を与え、それが子どもの目標志向性にプラスの影響を与え、そして子どもの学習方略と学習コンピテンスにもプラスの影響をもたらすことを報告している。この報告は、中学生の学習活動は学級や学校での目標構造のみならず、家庭での親の子育てや教育に関連して調和した共通の意識や行動・態度から影響を受けることを示したものであり、家庭環境の重要性を指摘している。

上記の一連の報告は、子どもの学習活動に対する家庭環境の重要性を指摘したものであるが、友人関係を取り上げてはいない。これに関して、より現実的な視点から検討すると、学級や学校での日常生活には友人との関係が存在し、その相互の関係が影響している。しかも、友人関係のあり方は友人と関わっている生徒自身の個々の感情、行動が要因として存在する。これらの諸行動の発生源は元々、多くの時間を費やしてきた家庭の中の影響も大きく存在すると考えるのが自然であろう。したがって、本研究では家庭環境を基本に据えて、家庭の目標構造が、子どもの友人関係の在り方に与える影響、友人関係が生徒の学習への取り組み方に与える影響、そして学習能力へ与える影響について検討する。

このように視点に基づいて、尾形 (2013) の結果に基

づいて、学級・学校での友人関係を変数として取り上げ、生徒の学習行動に及ぼす影響について分析検討する。本研究では具体的に次の2点を明らかにすることを目的とする。

1. 家庭の目標構造と友人関係の関係について、構造的に把握し、構造により生徒の学習方略、学習コンピテンスに違いが見られるか検討する。
2. さらに、家庭の目標構造、友人関係が学習方略、そして学習コンピテンスに及ぼす影響について下記のようなモデルに基づき、検証することを目的とする。

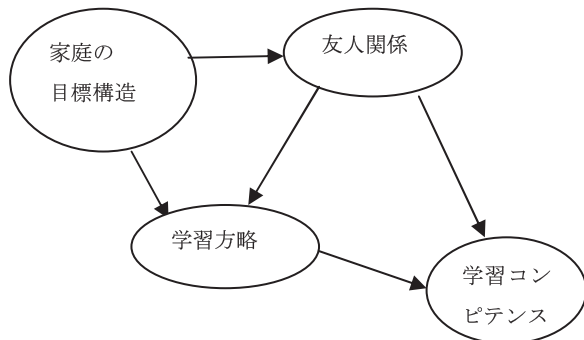


Figure1 モデル図

方法

1. 調査対象

中学2年生の頃の家庭環境と学習状況について分析を加えることを目的として、大学生からみた状況を中心とするために、愛知県内の大学生206名を対象とした(男子67名、女子133名、無記入6名。学部学生1年生174名、3年生5名、4年生12名、大学院修士課程1年10名、2年生4名、無記入1名)。平均年齢18.91歳。

中学2年生を調査対象として取りあげたのは、小学校時代とは異なり、教科がより専門的になると同時に高校進学を中心とする受験を徐々に意識し、自分の意志に基づいて勉強に取り組むことが求められる時期に移行する時期であるため、より意識された行動へと変化すると考えられるからである。また、同時に学校生活も安定し始め、友人関係も形成され、学校生活に影響をもたらすと考えられるからである。

2. 調査用紙

- (1) 学生の学年、性別、年齢を問う質問項目。
- (2) 家庭の目標構造についての尺度：Epstein (1989) と Bempechat (1992) を参考に作成、25項目よりなる。ここでは、1課題の構造と活動の多様性、2権威的構造、3報酬の構造、4集団化の構造、5評価の構造6時間の構造化、の各要素を含む項目を取りあげた。
- (3) 友人関係の状況についての尺度：石田(2003)による、生徒の学校での適応感尺度などを参考に、遊びや勉強を

介した友人関係の状況について作成。10項目よりなる。
 (4) 生徒の学習方略の尺度：Niemi-virta (1996) によって作成され、Yamaguchi & Tanaka (1998) が翻訳した学習方略尺度(14項目)を用いた。これは、深い処理の方略尺度、浅い処理の方略尺度、セルフ・ハンディキャッピングの方略尺度の3つの下位尺度から構成されている。それぞれ5項目、4項目、5項目からなっている。
 (5) 生徒の学習コンピテンスの尺度：桜井(1983)を参考に作成した。10項目からなる。

3. 調査時期

2013年7月

講義を通して学生に説明し、協力してくれる学生に質問紙を配布し記入後回収した。

結果

1. 質問紙の構造化

調査で使用した各質問紙がどのような構造からなっているかを明らかにするために因子分析を実施した。

(1) 家庭の目標構造を測定する質問紙

親の子どもに対する目標志向の伝え方について、その構造を明らかにするために25項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰率から4因子を採用し、プロマックス回転を行った。結果をTable 1に示す。第1因子は項目5(勉強しないと親に叱られることがあった)、項目8(宿題があるとき、それを片づけてしまうように指示されることがあった)、項目6(宿題をやって良い成績を取るよう言われた)等の項目の負荷が高く、良い成績を取るために勉強することを重視し強要しているため「成績偏重」と命名した。第2因子は項目20(テストで良い成績を取ると褒められることがあった)、項目24(成績が伸びると褒められることがあった)、項目2(成績が伸びると努力を認めてくれた)等の項目の負荷が高く、子どもの成績の上昇にこだわり、そのために賞賛を行う親の状況を示しているため「成績上昇への賞賛」と命名した。第3因子については、項目22(成績が悪いときでも将来のためにじっくりと取り組むように励ましてくれた)、項目23(勉強することは必要であると最終的には自分で考えるように接してくれた)、項目13(勉強については常に精神的に支えになってくれた)等の項目の負荷が高く、勉強の結果よりも勉強の必要性やじっくりと取り組む姿勢を重視していると考えられるので、「取り組み方の重視」と命名した。第4因子は項目21(親は勉強に関することは担任とよく連絡を取り合っていた)、項目19(親は勉強できる友人と仲間になることを薦めた)、項目17(親は授業参観、PTAの集まりなど学校に良く来ていた)等の負荷が高く、親と学校との連携を示していると考えられるので、

Table1 家庭の目標構造についての因子分析結果 (主因子法promax回転後)

項目	F1	F2	F3	F4
F1:成績へのこだわり ($\alpha = .879$)				
5.勉強をしないと親に叱られることがあった	.834	-.053	-.69	.032
8.宿題があるとき、それを片付けてしまうように指示されることがあった	.794	.066	-.033	-.182
6.宿題をやって良い成績を取るよう言われた	.705	-.023	-.027	.155
1.親は良い成績を取ることが大切であると言っていた	.682	.019	-.036	.089
25.勉強することは大切だと言われた	.630	.132	.350	-.173
9.親は学校の宿題を私がやっているか気にかけてくれた	.608	.040	.042	.010
12.勉強に関することについては、親はしっかりやるようにかかわっていた	.487	.038	.178	.245
F2:成績上昇への賞賛 ($\alpha = .863$)				
20.テストで良い成績を取ると褒められることがあった	.067	.991	-.199	.014
24.成績が伸びると褒められることがあった	.110	.910	-.026	-.045
2.成績が伸びると努力を認めてくれた	-.045	.749	.101	-.004
11.勉強に取り組むと褒められることがあった	.033	.548	.147	.41
14.良い成績がとれたとき親に伝えるのが楽しかった	-.056	.445	.138	.142
F3:取り組み方の重視 ($\alpha = .810$)				
22.成績が悪いときでも将来のためにじっくりと取り組むように励ましてくれた	.118	-.109	.752	.045
23.勉強することは必要であると最終的に自分で考えるように接してくれた	.167	-.083	.743	-.183
13.勉強については常に精神的ささえになってくれた	-.075	.179	.618	.018
3.勉強については、結果よりも一生懸命取り組むことが大切だと教えてくれた	-.179	.072	.599	-.080
16.親は勉強のことについて、私の悩みなど良く相談のってしてくれた	.067	.039	.590	.092
10.親は私の勉強の結果については常に暖かく見守ってくれた	-.185	.163	.589	.008
7.親は、宿題や試験問題について、解決の方法など一緒に考えてくれた	.199	-.158	.529	.208
F4:学校との連携 ($\alpha = .616$)				
21.親は勉強に関することは担任とよく連絡を取り合っていた	-.056	.002	-.027	.852
18.親は勉強することの楽しさを教えようとしていた	.247	.053	-.135	.485
17.親は授業参観、PTAの集まりなど学校に良く来ていた	.026	.042	-.079	.392
4.親は担任や先生方と良く話し合いをして、私に聞かせてくれることがあった	-.008	.035	.318	.367
因子相関	F1	F2	F3	F4
		.551	.251	.257
			.551	.257
				.551

Table2 友人関係についての因子分析結果 (主因子法promax回転後)

項目	F1	F2
F1:遊び友達 ($\alpha = .828$)		
6.友達と一緒にいると楽しかった	.831	.048
9.友人とは勉強以外の楽しいことなど面白い話をするが多かった	.722	-.180
5.私は友人に恵まれていると思う	.708	.167
1.いつも一緒に話したり遊んだりする友人がいた	.490	.201
2.私は友人から好かれていると思う	.419	.231
F2:受験や将来のことについての相談相手 ($\alpha = .789$)		
7.友人とはこれからの受験や進学のことについて話すが多かった	-.189	.859
3.将来のことについて話し合える友人がいた	.032	.713
8.私の友人は、自分を本当にわかってくれていた	.164	.588
10.一緒に勉強について話し合える友人がいた	.174	.471
因子相関	F1	F2
		.744

「学校との連携」と命名した。(質問項目の信頼性については4因子それぞれの α 係数は順に、.879,.863,.810,.616であり、十分な内的整合性を有していることが示された。第4因子については低めであるが項目数から見て妥当な値と考える。)

(2) 生徒の友人関係を測定する質問紙

子どもの学校での友人関係の構造を明らかにするために10項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰率から2因子を採用し、プロマックス回転を行った。結果をTable 2に示す。第1因子は項目6(友だちと一緒にいると楽しかった)、項目9(友人とは勉強以外の楽しいことなど面白い話をするが多かった)、項目5(私は友人に恵まれていると思う)等の負荷が高く、楽しく過ごすことを中心とする友人との関わりを示しているため、「遊び友達」と命名した。第2

因子は、項目7(友人とは、これからの受験や進学のことについて話すが多かった)、項目3(将来のことについて話し合える友人がいた)、項目8(私の友人は、自分のことを本当に分かってくれていた)等の項目の負荷が高い。またこれらは、将来のことと自分のことを理解してくれているという内容を示しているため、「受験や将来についての相談相手」と命名した。各因子の α 係数はそれぞれ、.828,.789であり、十分な内的整合性を有していることが示された。

(3) 生徒の学習方略を測定する質問紙

生徒の学習方略を測定する質問紙の構造化のために、14項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰率から3因子を採用し、プロマックス回転を行った。結果をTable 3に示す。第1因子は項目1(勉強したことがちゃんとわかったのか、自分で確かめるよう

Table3 学習方略に関する因子分析結果 (主因子法promax回転後)

項目	F1	F2	F3
F1:深い処理の方略 ($\alpha = .763$)			
1.勉強したことがちゃんと分かったか、自分で確かめるようにしていた	.746	.069	.148
3.宿題やテストのための勉強をしているとき、どこが分かっていないのかを自分で採点するようにした	.680	.184	.087
4.難しい宿題をするとき、私はそれをやろうとさえしないことがあった	-.605	.136	.136
13.勉強しているとき、よく分からなかったところは何回も勉強し直すことにしていた	.564	.343	.020
2.学校の宿題が難しいとき私はそれをやろうとさえしないことがあった	-.540	.142	.252
9.テストのための勉強をしているとき、分からないことがあっても教科書をそのまま覚えようとした	-.422	.229	.009
F2:浅い処理の方略 ($\alpha = .672$)			
6.勉強やテストのための勉強をするとき、先生がテストに出しそうなところを勉強した	-.265	.788	-.119
14.勉強やテストのための勉強をするとき、先生が重要だと言ったところを勉強した	-.088	.707	-.010
11.勉強しながら、一番大切なところを理解するようにしていた	.105	.475	-.041
8.勉強しながら、教科書で何が大切なのかを見つけ出すようにつとめた	.328	.405	.059
F3:セルフハンディキャップ ($\alpha = .727$)			
10.難しい宿題をしなければならぬとき、私は他のことを始めようとするのがあった	-.146	-.062	.769
7.難しい宿題をするとき、私は他に違うことをしたくなるのがあった	-.062	.005	.739
12.テストの勉強をするとき、そのための勉強をしないで他の勉強をすることがあった	.158	-.092	.547
因子相関	F1		
	F2	.326	
	F3	-.424	.071

Table4 学習コンピテンスの因子分析結果 (主因子法promax回転後)

項目	F1	F2
F1:勉強に対する肯定的姿勢 ($\alpha = .785$)		
9.勉強は良くできたと思う	.824	.036
7.問題は殆ど解けた	.785	-.020
6.クラスの友達と同じくらい頭が良いと思った	.608	.00
4.勉強は良くでき、学校は好きだった	.563	.093
1.学んだことは簡単に思い出すことができた	.492	.116
10.勉強は短い時間で勉強することができた	.459	-.069
F2:得意科目 ($\alpha = .617$)		
5.私は理数系が得意科目である	.332	-.766
8.私は社会など人文系が得意である	.293	.585
2.私は国語が得意科目であった	.176	.504
因子相関	F1	
	F2	.096

にしていた)、項目3(宿題やテストのための勉強をしているとき、どこがわかっていないのかを自分で採点するようにしていた)、項目4(難しい宿題をするとき、私はそれをやろうとさえしないことがあった)(負の負荷)等の負荷が高く、自ら深く考えてしっかりと取り組む姿勢が示されているので「深い処理の方略」と命名した。第2因子は項目6(勉強やテストのための勉強をするとき、先生がテストに出しそうなところを勉強した)、項目14(勉強やテストのための勉強をするとき、先生が重要だと言ったところを勉強した)等の項目の負荷が高く、自分で考えて進めるよりも先生の指導に沿った比較的浅い処理方法であるので「浅い処理の方略」と命名した。第3因子は項目10(難しい宿題をしなければならぬとき、私は他のことを始めようとするのがあった)、項目7(難しい宿題をするとき、私は他に違うことをしたくなるのがあった)等の負荷が高く、辛い場

面から逃れようとしている姿勢を示している。「セルフ・ハンディキャッピング」と命名した。各因子の α 係数はそれぞれ、.763,.672,.727であった。第2因子は若干低い値ではあるものの内的整合性を有していると判断した。

(4) 生徒の学習コンピテンスを測定する質問紙

生徒の学習コンピテンスを測定する10項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰率から2因子を採用し、プロマックス回転を行った。結果をTable 4に示す。第1因子は項目9(勉強は良くできたと思う)、項目7(問題はほとんど解けた)、項目6(クラスの友達と同じくらい、頭が良いと思った)等の負荷が高く、勉強に対する肯定的な姿勢を示しているため、「勉強に対する肯定的姿勢」と命名した。第2因子は項目5(私は理数系が得意科目であった)(負の負荷)、項目8(私は社会など人文系が得意である)等の負荷が高

く、得意科目に関する内容を示しているので「得意科目」と命名した。各因子の a 係数はそれぞれ、.785、.617であった。第2因子の値が若干低いものの、学習コンピテンスを構成する重要な項目であり、また項目数から見て妥当と思われるので使用した。

(5) 生徒の学習能力に及ぼす家庭の目標構造と友人関係の影響についての検討

生徒の学習に及ぼす影響について検討を加えるために、家庭の目標構造、友人関係を基とし探索的に分析を加えた。ここでは、家庭の目標構造と友人関係、学習方略、学習コンピテンスそれぞれの因子分析の結果に基づき、各因子の下位尺度平均得点を算出した。

次に、家庭の目標構造4因子と友人関係の2因子の各因子得点に基づいて、被験者を分類し群分けした。群間にどのような構造が存在するかを確認するために各因子の下位尺度をZ得点に変換し、階層的クラスタ分析(Ward法)を行った。抽出されたデンドログラム及び解釈可能性から3つのクラスタ構造を妥当と判断した(Figure 2)。第1クラスタは「学校との連携」が最も高く、次いで「成績偏重」が高い。すなわち、親による成績偏重と学校との連携が高く、親が子どもの成績のことを気にかけて学校との連携を取るものの、勉強の必要性や取り組み方については子どもとの意思疎通が十分に図られていない面が伺えるので「親の期待優先群」とした。第2クラスタは全てがマイナスになっている。中でも「学校との連携」が最も低く、次いで「取り組み方の重視」「成績偏重」「成績上昇への賞賛」が低い。親として学校との連携を取らず、子どもも勉強についての期待とこだわりも持たない家庭を示しているので「学校・学業無

関心群」と命名した。第3クラスタは家庭の目標構造の「取り組み方の重視」と「成績の賞賛」が高く、「遊び友達」と「受験や将来のことについての相談相手」共に高い。つまり、子どもの学習に対する方向づけを支え、成績の結果について受け入れ励まし、また友人関係も比較的良好な状況にある群であることから「学業志向群」と命名した。

これらの家庭での目標構造と友人関係に基づいて構成された群のパターンの違いによって、生徒の学習方略と学習コンピテンスにどのような差が生じるのであろうか。目的の1を検証するために、3つのクラスタを独立変数、学習方略、学習コンピテンスを従属変数とする1要因の分散分析を行い、更にTukey法(5%水準)による多重比較を行った(Table 5)。

まず、学習方略についてみると「深い処理の方略」では「学業志向群」が「学校・学業無関心群」と「親の期待優先群」よりも有意に高いことが確認された。この結果から、親が子どもの勉強のことについて子どもの立場に立って積極的に関与し、子どもが友人を通して勉強に関心を持つといった、家庭も子どもも一体となって関心を持つ場合に学習への関わりが高いといえる。また、「セルハンディキャップ」では「親の期待優先群」が「学業志向群」よりも高い傾向を持つことも確認された。

「学習コンピテンス」については「勉強に対する肯定的姿勢」において「学業志向群」が「学校・学業無関心群」よりも高い傾向を有することが確認された。

「学習方略」と「学習コンピテンス」に及ぼす影響について、家庭の親のかかわりによる目標構造と生徒の友人関係について検討を加えたが、さらに詳細な検討を加

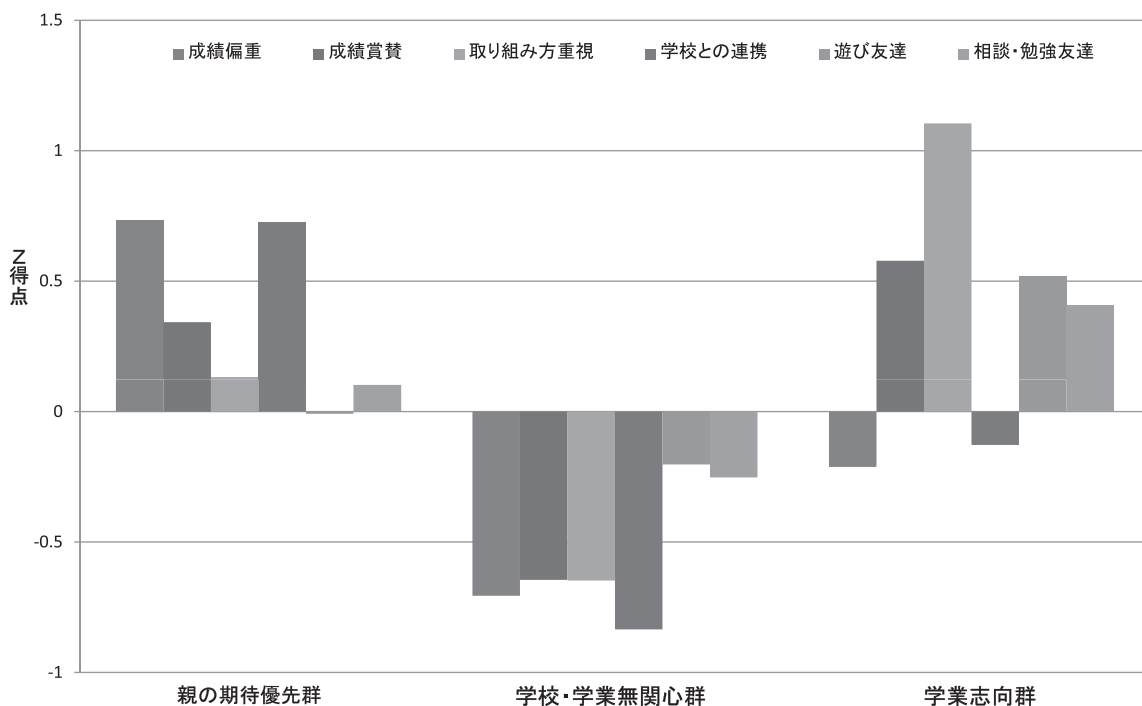


Figure2 家族の目標構造・子どもの友人関係に関するクラスタ分析

Table5 クラスタ別に見た学習方略、学習コンピテンスの比較

	クラスタ I	クラスタ II	クラスタ III	F値	多重比較
	(親の期待優先群)	(学校・学業無関心群)	(学業志向群)		
	M (SD)N	M (SD)N	M (SD)N		
(学習方略)					
深い処理	2.92(.59)83	2.90(.60)77	3.21(.44)38	4.16*	III > I, II
浅い処理	3.09(.48)83	2.99(.69)75	3.12(.48)36	0.78	
セルフハンディキャップ	2.69(.69)82	2.55(.73)79	2.39(.71)37	2.37 [†]	I > III
(学習コンピテンス)					
勉強に対する肯定的姿勢	2.97(.60)83	2.79(.59)77	3.07(.51)37	3.51*	III > II
得意科目	2.71(.80)83	2.61(.78)77	2.69(.78)37	0.30	

*P < .05 †P < .10

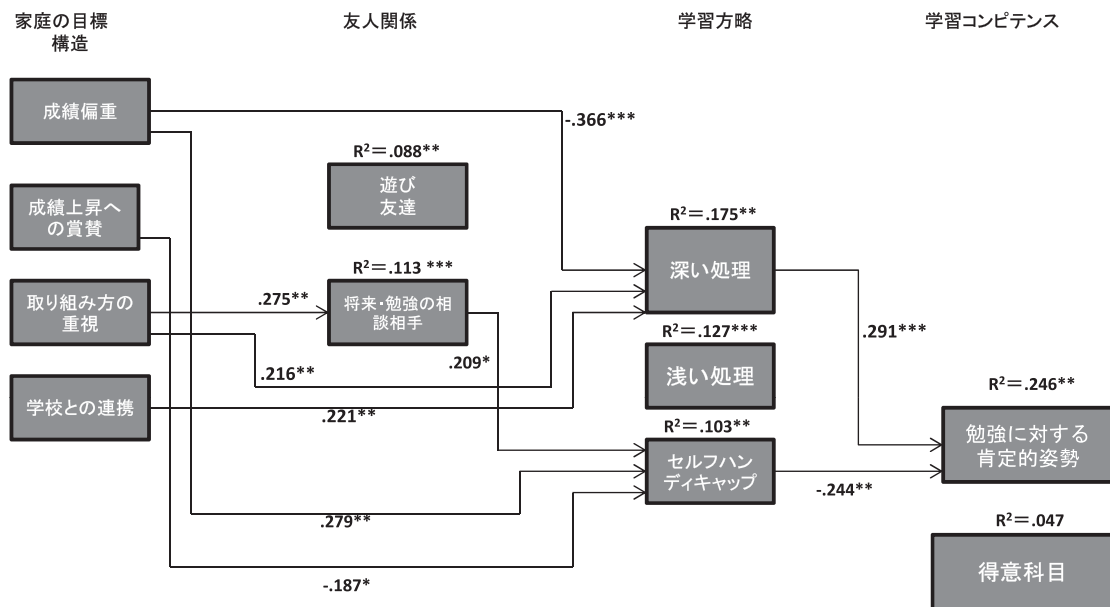


Figure3 学習方略、学習コンピテンスについてのパスダイアグラム

えるために本研究の目的の2に示したモデル図の検証を行った。そのために、「学習コンピテンス」を従属変数とし、「家庭の目標構造」「友人関係」「学習方略」を独立変数とする重回帰分析（強制投入法）を実施した。次に、「学習方略」を従属変数、「家庭目標構造」「友人関係」を独立変数とする重回帰分析（強制投入法）を、さらに「友人関係」を従属変数、「家庭の目標構造」を独立変数とする重回帰分析（強制投入法）を実施した。ここでは多重共線性の問題は見られなかった。また、結果に基づいて、「家庭の目標構造」から「学習コンピテンス」に辿り着くパスだけを取りあげで作成したパスダイアグラムを Figure 3 に示した。

図からみる限り、学習コンピテンスの「勉強に対する肯定的姿勢」にのみパスが示されている。「学習コンピテンス」の「勉強に対する肯定的姿勢」に流れるパスについてみると、「家庭の目標構造」の「成績偏重」から有意な負のパスが、また「学校との連携」「取り組み方

の重視」それぞれから有意な正のパスが「深い処理」に示されている。さらに「深い処理」から「勉強に対する肯定的姿勢」に有意な正のパスが確認された。これらの結果から、「成績偏重」は「深い処理」を軽減し「勉強に対する肯定的姿勢」を減少させることが示されたといえる。一方「学校との連携」「取り組み方の重視」は「深い処理」を増加させ「勉強に対する肯定的姿勢」を増加させることも示されたといえる。

また、家庭の目標構造の「成績偏重」と「成績上昇への賞賛」から「学習方略」の「セルフハンディキャップ」にそれぞれ有意な正と負のパスがみられ、そこから「勉強に対する肯定的姿勢」に有意な負のパスが確認された。また、「家庭の目標構造」の「取り組み方の重視」からは「友人関係」の「将来・勉強の相談相手」に有意な正のパスが、そこから「セルフハンディキャップ」に有意な正のパスがみられ、さらにそこから「勉強に対する肯定的姿勢」に有意な負のパスが確認された。つまり、「成

績偏重」は「セルフハンディキャップ」を増加させ、「成績上昇への賞賛」は「セルフハンディキャップ」を減少させ、結果として前者は「勉強に対する肯定的姿勢」を減少させ、後者は増加させることが示された。また、「取り組み方の重視」は「将来・勉強の相談相手」を増加させ「セルフハンディキャップ」を増加させ、結果として「勉強に対する肯定的姿勢」を減少させることが示されたといえる。

考察

中学生との学習コンピテンスに影響を及ぼす要因として、家庭の目標構造と友人関係の2変数を取り上げ、検討を加えた。

家庭の目標構造の在り方が子どもの学業を中心とする学校生活の在り方に影響をもたらすであろうと考えられるが、本研究はこのような視点に基づいて、家庭の目標構造と生徒の友人関係を基本とした。この2変数を構造的に把握するためにクラスタ分析を加えたところ「親の期待優先群」「学校・学業無関心群」「学業志向群」の3群が抽出された。この各群の生徒の学習方略と学習コンピテンスの相違について比較検討を加えたところ、「学業志向群」が学習方略の「深い処理」において「親の期待優先群」と「学校・学業無関心群」よりも優位に高かった。同様に「セルフハンディキャップ」についても「学業志向群」は「親の期待優先群」よりも優位に低かった。「学業志向群」は本来的には、親として子どもの勉強に関心を持ちながらも子どもに主体性を持たせ、子どもが自分で考えて取り組む姿勢を重視する立場と考えられるが、これは子どもの学習に対する自律的な姿勢や自己有能感の育成にもつながるものと考えられる。しかも、友人関係においても「遊び友達」としての関係のみならず「受験や将来のことについての相談相手」としての関係を展開しており、友人が具体的な友人関係を展開するための重要な要因として存在している。つまり、学校生活においても友人と一緒に遊ぶのみならず、将来のことを含めて勉強にもかかわるための相手として存在しているのであり、学校や学級生活での適応が図られていると推測される。

また、学習コンピテンスの「勉強に対する肯定的姿勢」において「学業志向群」は「学校・学業無関心群」よりも優位に高かったが、結果として親の子どもに対する日常の勉強に対する関心が良好であり、さらには子どもが進学などの問題に悩みながらも取り組んでいくことが積極的な要因として存在すると推測される。また、これは学習に対する動機づけとの関連でも指摘できることであり、良好な動機づけ形成にも影響することは容易に推測されることである。以上の結果から中学生の学業コンピテンスには、家庭の目標構造と友人関係が関連している

ことから、少なくとも家庭という環境と友人関係が影響要因として存在することが確認されたと考える。

さらに、研究の目的2で指摘した仮設モデルについては一部支持されたと考える。しかし、学習コンピテンスは友人関係を介在して影響をもたらすとした仮説は、「取り組み方の重視」→「将来・勉強の相談相手」→「セルフハンディキャップ」→「勉強に対する肯定的姿勢」においてのみ確認されただけであり、全体としては「友人関係」の強い影響力は確認されなかった。上記の流れは、将来のことや勉強の事についての相談相手としての友人がいても「セルフハンディキャップ」の学習方略を高め、結果として「勉強に対する肯定的姿勢」を減少させるという結果を示しているだけである。この結果は、良好な友人関係は学習方略と学習コンピテンスに積極的な影響をもたらすとした予想とは異なる結果である。これに関しては所属する集団の持つ特性に視点を向ける必要があると考える。つまり、集団は一様な特性を有しているのではなく集団独自の特徴を有することがあり、その特徴によってメンバーは影響を受けているということが考えられるからである。Ryan (2001) は仲間集団の持つ動機づけに注目しており、高校生を対象とした研究から、高い動機づけや学業成績を有する集団に所属している場合には動機づけや学業成績の低下が少なかったのに対して、低い動機づけや学業成績を有する場合には所属する生徒の動機づけや学業成績が低下するということを明らかにしており、所属集団の持つ動機づけや学業生成の在り方の重要性を指摘している。同様に、Wentzel, Barry, & Caldwell (2004) は友人関係の中から学業成績よりも向社会的行動の影響を受けることを指摘しており、結局は所属する集団の持つ特性が影響をもたらすとして、集団の持つ特性とそこに展開される友人間の相互作用の重要性を指摘している。しかも、学業に対する共通の意識を持った集団に所属しても、友人間のお互いの学業成績の比較によっては種々の多岐にわたる自己評価が行われ、自己の学習活動に影響を及ぼすことも指摘されている。これは社会的比較という考え方であるが、これについては学業成績が高いグループに所属する場合には負の自己評価を持ちやすく、低いグループの場合には高い自己評価を持ちやすいなど複雑な変数も多く影響することも指摘されており一概に結論を出すのは難しい(外山, 2004)。本研究で扱った中学時代の友人関係の状況については、特に中学2年生時代の様子について扱ったものであるが、中学2年生は学校生活に慣れ、勉強も友人関係も少しずつ形を成す時期と考えられ、勉強については3年生に向けて取り組み進学についての意識もまだ十分に形成されていない時期と考えられる。友人関係も同様に気に入った人、話の合う人、価値観の一致する人など種々の要因によって形成され、徐々に深まってい

く時期でもあると考えられる。したがって、勉学に対しての生徒の行動を大きく左右するには至っていないとも考えられる。

一方、友人関係を除いて、「家庭の目標構造」→「学習方略」→「学習コンピテンス」の流れが確認された。この流れの中には「成績偏重」は学習コンピテンスの「勉強に対する肯定的姿勢」を減少させること、「成績上昇への賞賛」「取り組み方の重視」「学校との連携」は「勉強に対する肯定的姿勢」を増加させることが示されており、親の都合によって子どもの学業を統制することはマイナスの影響をもたらすことが示唆されているように思われる。あくまでも、子どもが勉強するための関わり方や環境作りが重要であることが示されていると考えられる。

以上のように、中学生の学習方略と学習コンピテンスを伸ばすための要因として、家庭の目標構造つまり親子間に展開される教育に対する方針と親の行動が重要要因の一つとして挙げられることが指摘されたといえよう。さらには、学校での勉強、遊びなどの課題を交えた友人がいることが合わせて重要な要因として存在することが示唆された。しかし、友人関係については、学年としての流れの中での特性やそのグループがどのような要因で構成されているかも合わせて検討することが必要であると考えられる。

今後友人関係の形成要因について条件統制をしてより具体的に分析検討を進めていくことが求められる。また、本研究は大学生に中学生時代のことを回想法により調査しているが、今後はさらに中学生に直接質問することでより現実的で詳細な結果を求めていくことが必要である。

引用文献

- Altermatt, E.R., & Pomeranz, E.M. 2003 The development of competence-related and motivational beliefs. An investigation of similarity and influence among friends. *Journal of Educational Psychology*, **95**, 111-123.
- Ames, C. 1992 Classrooms: Goal, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, **84**, 261-271.
- Ames, C., & Archer, J. 1988 Achievement goals in the classroom : Students' learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology*, **80**, 260-267.
- Bansal, S., Thind, S.K., & Jaswal, S. 2006 Relationship between Quality of Home Environment, Locus of Control and Achievement Motivation among High Achiever Urban Female Adolescents. *J. Hum. Ecol.*, **19**(4), 253-257.
- Bempechat, J. 1992 The Role of Parent Involvement in Children's Academic Achievement. *The School Community Journal*, **2**, 31-41.
- Dweck, C.S., & Leggett, E. 1988 A social-cognitive approach to motivation and Personality. *Psychological Review*, **95**, 256-273.
- Epstein, J. 1989 Family structure and student motivation : A developmental perspective. In *Research on motivation in education 3: Goals and cognitions*, edited by C. Ames and R. Ames. New York : Academic Press.
- 石田靖彦 2006 学校への適応を媒介する要因としての児童・生徒関係 愛知教育大学研究報告, 55 (教育科学編), 103-109.
- 石田靖彦 2005 児童・生徒の友人関係が学業達成に及ぼす影響, 愛知教育大学研究報告, 54 (教育科学編), 109-116.
- 石田靖彦 2003 動機づけ志向性が交友関係の形成と対人・学業生適応に及ぼす影響 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, **6**, 231-238.
- 伊藤忠弘 1995 自尊心の維持と高揚 宮本美佐子・奈須正裕編 達成動機の理論と展開 続・達成動機の心理学 金子書房 pp.161-186.
- Maehr M.L., & Midgley, C. 1991 Enhancing student motivation : A school wide approach. *Educational Psychologist*, **26**, 399-427.
- Marsh, H.W., Kong, C.K., & Hau, K.T. 2000 Longitudinal multilevel models of the big-fish-little-pond effect on academic self-concept: Counterbalancing contrast and reflected-glory effects in Hong Kong schools. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 337-349.
- Muola, J.M.. 2010 A study of the relationship between academic achievement motivation and home. Environment among standard eight pupils. *Educational Research and Reviews*, **5**, 213-217.
- 中谷素之 2002 児童・生徒の社会的責任目標と友人関係、学業達成の関連－友人関係を媒介とした動機づけプロセス検討－ 性格心理学研究, **10**, 110-111.
- Niemivirta, M. 1996 *Motivational-cognitive components in self-regulated learning*. Paper presented at the 5th International Conference on Motivation, Landau, Germany.
- Nolen, S.B 1988 Reasons for studying: Motivational orientations and study strategies. *Cognition and Instruction*, **5**, 269-287.
- 尾形和男 2013 中学生における家庭の夫婦関係が家族の目標構造、生徒の達成目標志向、学習方略、学習コ

- ンピテンスに及ぼす影響－大学生の視点からみた状況を中心として－ 教科開発学論集, (第1号): 19-32.
- Ryan, A. M. 2001 The Peer group as a context for the development of young adolescent motivation and achievement. *Child Development*, 72, 1135-1150.
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス尺度の作成 教育心理学研究, 3, 245-249.
- 清水欽也 2007 理科成績を規定する家庭的要因の影響 2007 国立教育政策研究所紀要, 136, 77-90.
- 外山美樹 2004 中学生の学業成績と学業コンピテンスの関係に及ぼす友人の影響 心理学研究, 75, 246-253.
- Tesser, A. 1988 Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 181-227.
- Wentzel, K.R., Barry, C.M., & Caldwell, K.A 2004 Friendships in middle school: Influences on motivation and school adjustment. *Journal of Educational Psychology*, 96, 195-203.
- Wigfield, A., Eccles, Y.J.S., Yoon, K.S., Harold, R. D., Arbretton, A.J.A., Freedman-Doan, C., & Blumenfeld P.C. 1997 Change in children's competence beliefs and subjective task values across the elementary school years: A 3-year study. *Journal of Educational Psychology*.
- Wolters, C.A., Yu, S.L., & Pintrich, P.R. 1996 The relation between goal orientation and students' motivation beliefs and self-regulated learning. *Learning and Individual Differences*, 8, 211-238.
- Yamauchi, H., & Miki, K. 2003 Longitudinal analysis of the relations between perceived Learning environment, achievement goal orientations, and learning strategies: Intrinsic-extrinsic. Regulations as a mediator. *Psychologia*, 46, 1-18.
- Yamauchi, H., & Tanaka, K. 1998 Relations of autonomy, self-referenced beliefs, and self-regulated learning among Japanese children. *Psychological Reports*, 82, 803-816.
- Zimmerman, B.J., & Martinez-Pons, M. 1990 Student differences in self-regulated learning: Relating grade, sex, and giftedness to self-efficacy and strategy use. *Journal of Educational Psychology*, 82, 51-59.

【連絡先 尾形 和男

E-mail: kogata@aeu.ac.jp

A Study on Effects of Family Goal Structure on Friendship, Learning Strategies and Learning Competence in Junior High School Students

KAZUO OGATA

Faculty of Education, Aichi University of Education

Abstract

The purpose of this study was to examine the influence of family goal structure on friendship, learning strategies and learning competence in junior high school students. 206 university students (mean age 18.19 years) completed questionnaires designed to investigate the relation between family goal structure, friendship, learning strategies and learning competence in their own junior high school course. Cluster analysis was carried out and following result was indicated. When a family's goal structure led to a child's learning method and a child's relationships with friends were good, a child took the deep learning strategies. However, when a family's goal structure was directly linked with a child's achievement, there was a tendency for the negative learning strategies to be formed. Next, path analysis was carried out and following result was indicated. When parents had the concern about a child's learning method, a child's effective deep learning strategies and positive learning strategies increased. The concern about the learning method of parents' child made the child's friend increase, and it made positive learning competence increase. And the communication with parents and a teacher made a child's effective deep learning strategies and positive learning competence. On the other hand, when parents emphasized a child's achievement superfluously, a child's deep learning strategies and positive learning competence decreased and the self-handicap learning strategies increased.

Keywords

family goal structure, friendship, learning strategies, learning competence, junior high school students